

2014/03/16

A年 四旬節第2主日

説教題：「あなたの望みは何か？」

創世記 12:1~8

ローマ 4:1~12

マタイ 20:17~28

17 イエスはエルサレムへ上って行く途中、十二人の弟子だけ呼び寄せて言われた。
18 「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、19 異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する。」

20 そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。21 イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」22 イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、23 イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」24 ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。25 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振っている。26 しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、27 いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

【起】

先週から教会の暦では四旬節が始まっています。そこで私たちは、主イエスが荒野において40日間にわたってサタンからの誘惑に遭われたことを聞きました。「40」という数字は、聖書の中で特別な準備期間を示す数字です。例えば、モーセは十戒を頂くためにシナイ山に四十日留まりました。そして約束の地に民を率いて40年もの間、荒野を彷徨いました。ヨナはニネヴェの人々に40日以内に改心しなければ街が滅びると預言しました。

このように40という数字は「試練」や「悔い改め」を意味し、来るべき時への「備え」の時に他ならないのです。40年、それは人生の荒野そのもの、つまり人の一生を表しているとも言えるかもしれません。その意味で、主イエスが宣教活動の一番最初に受けられた40日間の荒野での誘惑は、主が生涯にわたって繰り返し受け続けられた試練を象徴するものでありました。

主イエスにとって、最も大きな試練は十字架への道を歩むという決断であったと思います。主イエスが最初の受難予告を弟子たちにされたのは、ペトロがあなたこそキリストであると告白した直後でありました。しかしペトロを始め弟子たちは、そのようなことはあってはならないと主イエスを諫めはじめました。メシアとは神の前に義しい者、だからこそ神の助けにおいて力を揮って栄光の座に着く者であり、間違っても神からの呪いの象徴である十字架にかけられるような罪人であるはずがない、そう信じていたからです。

そのような弟子たちに主イエスは三度、ご自身の受難を説明されます。聖書における三度とは「何度も繰り返し」という意味です。ですから本日の箇所において、主イエスがご自身の受難をお語りになったとき、弟子たちは、心の中に影を落とすような黒雲を追い払うかのように陽気に振る舞い、イエス様の悪い癖がまた始まったぐらいにしか考えなかったのではないのでしょうか。時は、花の都エルサレムに入場する直前です。弟子たちの心の中には、イエスに様に従って早三年、いよいよ我らの先生が中央デビューするという華やいだ思いで一杯だったのではなかったかと思うのです。そして、自分達が家族や職業を打ち捨てて主イエスに従った代償、報いのつけを、出世払いで払ってもらえる時が目の前に迫っているのだと夢想していたのです。

【承】

ヤコブとヨハネが他の弟子たちに抜け駆けして主イエスにお願いをする記事はマルコも描いています。しかし、マタイの特徴は、そこに二人の母親も登場することです。いい年をした息子二人の立身出世のために、彼女は主イエスにひれ伏して願ったのです。主が栄光をお受けになったとき、自分の息子一人を右にもう一人を左に座らせて欲しいと。それは一番弟子であるペトロを出し抜くことでした。ペトロ、ヤコブ、ヨハネ。この三人は山上の変容の場所にも、ゲッセマネの祈りの時にも、主の側にいることが許された三人です。

しかし、ヤコブとヨハネはそれでも満足しない。目の上のたんこぶであるペトロよりも偉くなりたい、そう願っていたのです。そしてもし、この二人の兄弟がペトロよりも偉くなったとしたら、次は何が起きるでしょうか？ 多分、アベルとカイン、エサウとヤコブの兄弟のように、このヤコブとヨハネの間でも争いが始まったことでしょう。私たちの望みや願いというものが、いかに主の御心から離れてしまっているかを思わざるを得ないのです。

しかし、主イエスはこの親子の願いを叱ったり一蹴したりしませんでした。深い憐れみをもって、主イエスが受ける杯の意味について論じて下さったのです。多分、この親子は主の杯を勝利の美酒と勘違いしていたのかもしれない。しかし、主イエスの杯とは十字架の死に他なりません。そのことを知らずにヤコブとヨハネは、主の杯を自分達も飲むことが出来ると語るのです。

この親子を笑うことは簡単です。しかし、その時私たちは自分はそのような愚かなまねはしない、そう思っているのではないのでしょうか。

ヤコブとヨハネの母親の姿を、もう一度マタイは登場させます。それはゴルゴタの丘にあります。「またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリヤ、ヤコブとヨセフの母マリヤ、ゼベダイの子らの母がいた。」(Mt27:55-56)

この時、ゼベダイの子らの母、すなわちヤコブとヨハネの母が、主イエスの十字架を仰ぎながら、そして自分がつい少し前イエス様に願い求めたことについて何を思い、何を考えていたのか、聖書は何も記していません。しかし、その時、十字架の許で彼女がはっきりと知ったことは、主イエスが息子達に約束した「杯」というものが、彼女が期待したような「栄光」とは全く異なるという事実でした。

そしてこの後、現実に彼女の息子であるヤコブは、教会を迫害したヘロデ・アグリッパ王によって剣で殺されたと使徒言行録は記しています。もうひとりの息子であるヨハネ、このヨハネが福音書や黙示録を書いたヨハネかどうかは分かりませんが、もしそうだとすれば彼の晩年は迫害が熾烈さを増す中、幽閉生活を過ごしたと考えられます。このようにゼベダイの息子達は、結果的に苦難の杯を飲み、主イエスの真の弟子としてその生涯を歩むことになったのです。そしてその歩みの中で、ヤコブ、ヨハネそしてその母親は繰り返し思い出したに違いない。主イエスがエルサレムへ入られる直前に自分達親子がどのような言葉を主に願ったのか。自分の鈍さ、愚かさを思う時、穴があったら入りたいような深い痛みと、それにも勝ってこの愚かな私の身代金となってお自分の命を献げて下さった主の恵みの大きさを思い出しながら歩いていったに違いないと思うのです。

【転】

ところで、今日の箇所を深く理解するために、この続きにある二人の盲人を主イエスが癒されたという出来事も一緒に考えてみたいのです。お読みします。29節から34節です。「一行がエリコの町を出ると、大勢の群衆がイエスに従った。そのとき、二人の盲人が道

端に座っていたが、イエスがお通りと聞いて、『主よ、グビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、『主よ、グビデの子よ、わたしたちを憐れんでください』と叫んだ。イエスは立ち止まり、二人を呼んで、『何をしてほしいのか』と言われた。二人は、『主よ、目を開けていただきたいのです』と言った。イエスが深く憐れんで、その目に触れられると、盲人たちはすぐ見えるようになり、イエスに従った。」

お聞きになって気づかれたでしょうか？ ヤコブとヨハネの二人の願い、そして二人の盲人の願い、そのどちらに対しても主イエスは「何をしてほしいのか」とお尋ねになります。ゼベダイの子達は栄光を求め、一方の盲人達は目を開けて頂くことを望むのです。一見、どちらも利己的な願いに見えます。しかし、マタイは意図的にこの二組を並べて書いたのです。そして記すのです。この二人の盲人の目が見えるように癒された時、彼らは主イエスに従ったということ。

目が開かれた二人は、主イエスに従っていき何を見たのでしょうか？ それは主イエスが引き渡され、侮辱され、むち打たれた後に十字架にかけられた姿であります。そしてそこで肉の眼に次いで霊の眼が開かれていったのです。この二人は通り過ぎようとしている主イエスを引き留め「憐れんで下さい」と叫ぶことが出来ました。この叫びは、私たちが礼拝の中で繰り返すキリエの原型となった言葉なのです。私たちは、己の心の目を開いて頂かなければ、主イエスのお姿を見る事が出来ない者なのです。見る事が出来なければ従っていくことも出来ないのです。だからキリスト者の願いは、絶えず主の憐れみによって目を開いて頂くことに他ならないのです。

【結】

先ほど歌いました讚美歌 306 番「あなたもそこにいたのか」。この曲は黒人霊歌として有名な曲です。歌う者、聞く者の心を強く揺さぶる霊的な深さを秘めています。

「あなたもそこにいたのか、主が十字架についたとき、ああ、今思い出すと、深い深い罪に、わたしはふるえてくる」。ヤコブとヨハネも同じように、自分達の愚かさに、その深い深い罪に震え身悶えしたことでしょう。同じように私たちも今日、「あなたもそこにいたのか？」そのように主イエスに問われているのです。しかし、それはいつまでも自分の罪の深みに沈みこむためではありません。むしろそれを逆転するためなのです。

これまで受難予告と簡単に語ってきました。そのために私たちはともすると勘違いをおこしやすい。なぜなら、主イエスのご自分の十字架の死だけを弟子たちに予告されたのではないのです。十字架の死と共に復活の勝利を予告しておられる。私たちはこの福音を聞き逃してはいけないのです。この福音を私たちに届けるために主は十字架へとおかかりになって下さったからです。

「あなたもそこにいたのか」という讚美歌は 1~4 節までは主の十字架と私たちの深い罪を歌います。悲しみと後悔と自分の犯した罪への恐ろしさの故に身も心も震え続けるので

す。そして一番深いどん底で、「主が十字架につけられ、釘打たれ、槍で刺され、墓に納められた」のは、正にこの私のためであったという信仰が立ち上がってくるのです。だからこそ最後の5節でこう賛美することが出来る。「あなたもそこにいたのか、主がよみがえられたとき、ああ、今思い出すと、深い深い愛に、わたしはふるえてくる」。

十字架に架けられたのは主イエスであると同時にこの私なのです。それ故に、十字架の死が復活の命へと変わる時、私の絶望は希望へと変えられていくのです。主が私たちにお与え下さった救いの恵みとは、私たちの深い罪を越えて与えられるこの深い深い愛に触れることなのです。

人知ではどうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン

以上本文 3,996 字